



中村俊定文庫  
文庫 18  
340  
2





山の上こそ草の葉と花をいさる  
 管巻消えり萩の園  
 車納菴の藤へ落ておれ  
 鼻とさし川あゝ水風呂  
 しみ元結きりし<sup>ハカ</sup>輻の<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>る<sup>ハ</sup>流  
 心<sup>ヨ</sup>の<sup>リ</sup>り<sup>リ</sup>待  
 掛人酒と止るを思ひさせ  
 夕日曇きし<sup>ハ</sup>糸衣の<sup>ハ</sup>輪<sup>ハ</sup>籠<sup>ハ</sup>屋

露 位 信 露 信 芥

花櫻神の鏡より咲て思ふ  
 岸し生るふ<sup>ハ</sup>若<sup>ハ</sup>松<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>露

位 信

右玉顔首尾と金

秋と都  
 谷の戸城書戸より多や麻の道  
 然う海の重喉り<sup>ハ</sup>先<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>能<sup>ハ</sup>く<sup>ハ</sup>似<sup>ハ</sup>ぬ  
 心<sup>ハ</sup>さ<sup>ハ</sup>つ<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>下<sup>ハ</sup>る<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>新<sup>ハ</sup>四<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>流<sup>ハ</sup>り<sup>ハ</sup>

如 自 来 信

雲の峰巒川、越えて細の秋  
 久住  
 顔日也山名、何れも秋の尾  
 杜丘  
 葉冠、九月の末の八日哉  
 雀平  
 朝歌の初、も終ると、雲う那  
 芥風  
 祝極也、一川蓮、若葉とも  
 叶長  
 夜渡の、人より、さるる、月  
 山町  
 枯、残る、り、り、月、若葉、一川  
 伍竹  
 虫の、福也、素と、よ、心、燈の中、も  
 志也信

雨、よく、枝、榎、も、海、邊、の、石、茶、所  
 守芳  
 世、の中、は、存、也、露、若、葉、茶、所  
 筠戸  
 甚、敷、く、又、実、の、目、く、は、縁、也  
 孤竜  
 海、く、く、女、房、持、り、り、寧、ふ、の、月  
 字石  
 南、座、を、心、せ、る、住、居、者、より、り  
 此君  
 い、ふ、は、ま、也、葛、珠、山、の、松、は、櫻、也  
 杏道  
 鶴、の、音、も、麻、も、別、く、は、葉、う、那  
 泉布  
 色、付、一、ち、う、く、虫、一、鹿、の、所  
 氷湖

上石田

こり月や波も落るも浮きも  
興平

葬や此類の少類はる垣  
韻弁

夕魚もえん控もまじりも  
二橋

稚鳥をうんと養ふは踊り  
満枝

和物の扱違ふ露のまを  
祇嶺

清り鐘竹堂んがも控も  
三遅

中不顔の柳戸へ落る新音ぬ  
里杏

若師ととくゆりて  
りて

ふも望と又も豆腐のハ重萍  
露新

有明の露虫ニ風出鳴子か  
妹豆

○ 女も物と色も是るも一紫哉  
半宵

朝露や又控もゆく峰の松  
麦止

いけりも虫も一程と別道里  
谷橋

其中よ家子と有て踊り那  
狐狂

秘書や百里も走る浪のり  
露新

ほりもまじり夕日城曲も存け月  
由画

三嶋録水改

小田原

藤下ゆりし中庭を祝く晴が

小四  
下四

夏央

微涼

初鮎也締の般帳を條多かど

渭音

名月也福隔々ふ水の一

帯雨

少り一火一遠る中けり折の雨

寒雪

春之部 秋仙行

夕顔のくも腰より紙をいれ

葦崎

字石

くも心吹く 桃のくも煙

玉露

泉あり水橋を睡のまははれて

調瑟

びんかく男はめくまよりり

光波

廿日折折とて雪も責中月

此君

春小屋の戸の空けり秋の戸

杏道

ハ箱と名後湯浅ハ草と海

光波

杉をまりぬく一ち地

詞悲







田子多山人其家在人と并に

破笠

まいと二部は兼ふ世の流

夕

水西は風もさよりと扱は月

高

銀心一若徒相出乃松

高

朝魚く新茶の西と茶

夕

天下知尚の制禁の事

高

いさゆらと兼ふ小便帰カ去来ミンナン

高

毎くまきいり如腰の細やと

夕

踏如来いり河原路を馬森

高

吉川かま行を傍の紙巻

高

長陣は田も出来ていさ

夕

く川堂子居と磯もあま

高

社世々自勝のほはいふり

高

人々巨扇と望み山里

夕

華の頃八相の鐘の鐘がも

高

星かんの如を春のま

高

出音の可くはあはると下はあは  
 さいろー一荷一程一措  
 敷ろぞき精進で美くも  
 狭くといふを細く狭く  
 多程の種のみと多程のかり  
 けくまは啼かて死ねるもあ  
 かりともいふやと女不いふ  
 ぞう貧乏やとあの人とあ

吾ふあ字傳の麻子も深ぬいて  
 常一丸を溜る置あり  
 東堂の世日く近き月のや  
 著於の茶衣とらん向  
 あの旁に霧は難と引ちま  
 雅掌のあもん附て新掌  
 善清場の胡日当きとあ日  
 湯の徒刻く神意とあ

下乙

掃くせて袖と目出度花の香

三

ふとく結下し一考も舞うら

露

小原の如く結云晴庚申塚の三指くま鹿溪橋  
の云笑と古きかやぢまの雲を

云ふ人<sup>苦</sup>に<sup>記</sup>野老哉

買明

親心子外酒や直教雑英哉

故人 故一

亥引やみふ海り<sup>子</sup>の<sup>子</sup>ま<sup>子</sup>引

黒露

一里下り二里おり里結初書哉

寒戦

白魚や折く登る海の高

久住

菜もや二間く<sup>ま</sup>ぬ<sup>ま</sup>る<sup>り</sup>

夏若

田一板をの、都丸かく睡

雪丸

明く<sup>結</sup>し<sup>下</sup>り<sup>て</sup>啼<sup>地</sup>ふ

夏露

昔暮の所<sup>さ</sup>ま<sup>短</sup>か<sup>ま</sup>付<sup>城</sup>

一咲

かり結世と<sup>ま</sup>り<sup>の</sup>結<sup>結</sup>哉

寒雪

折くま<sup>も</sup>か<sup>く</sup>く<sup>も</sup>鳴<sup>丸</sup>梅<sup>の</sup>道

寒雪

三圍の田かたは初分桂うけ

小田原

芦翁

秋もやむ産つけくあきの露

自來

春雨や十日く結 浮末堂

洵水

江島のゆすり

中より〜 莖はさかや磯にま

梅戸

糸遊の片り豆〜古柳

竹長

錢蓮と数〜て渡り却日か

莊崎

兔考

舟の板の園有〜志の雨

洞忌

白雪の片羽をいりく霞う那

露新

切干乃志を和ら 彼存哉

小田原

一路

喉事もあつてさ〜出る巖ふ

谷橋

人声いば仕舞より山さか

為戸

基と舟と唐の音あり 桃の花

帯雨

美濃耆老詩

十條文流さ〜喉や滝の花

杜丘

盞の影も流さ〜花の女

興平

山崎と咲志の先づりさつふ

小田原

得魚

やくさく 結露麦切ちり 小梅

卓尔

華の山麻片 一角と隠しり

碧堂

雨の日は麦の粒を留むるなり

一由 翠

多き一 中宵柳 若紳の音

字石

おのり 扱を治し 思ふ柳か

此君

四方く 花は咲くく 思ふ亦か

思露

坂一 一 里上りの茶つて哉

蚕花

春蟻改

垣木熊の色の瘦てはりけ

小田原

麦由

菰極や 穂を 治る 治る 治る

顔弁

松と 糸 若もの 色 けり 菰 結露

泉布

春 日や 梅 立 出 菰 山 梅

餅月

花は 瘦く あり 玉 貫 文 衣

玉貫

春之部終

夏之部

山閑如太古日長似少年

素丸

さみだんの山からつけてる紫うか

雨やとくまに待よかかしくか

黒露

ちりぢり壁のらげ建紙吹くは

窓雪

先序破意と踏ては舞より

老我

榛の来り常はお子かか育は月

野道

さくら流はと律のありき

馬雄

う

小幡綿素靴の上は秋空み

老我

つゆー雨粒と初ぬ焼燐

窓雪

君り代は先登第屋のさうり屋

馬露

雪の床間小山に伴作

素丸

俣豆とこねまの雲文くまは神

馬雄

かハ松葉くかんて名園

野道

所ハの喰いしとてお琴弾

窓雪

五十年賦の苔は山あふ

老我

のみまよ、ゆつて廣る 検断日 素丸  
 志入道の果なきく 天吹 馬雄  
 月世田村 龍寺とふ 新石 野道  
 意しし三人やふ入 若自 馬窟  
 翫し里あしきりけしを走る 馬雄  
 志しつ天意と結てつ朝いしら 野道  
 おどぞんとさうさち 教の案法在 老我  
 千鳥下いさ 帆しら城切る 素丸

関西いきし 起ゆきり 武若渡り 馬窟  
 連歌より 志成者もさすべし 意雪  
 畑いしせききよ 志やと女房 野道  
 お経と飯より 志りく 志家 黒窟  
 舟の音物 志る竹若の志 素丸  
 多ぬきと 志才 回士の 志 馬雄  
 崩き築上より 志りく 志明方 意雪  
 小石原の 志と 志りく 老我

つるふ菜も何りまゝの席の味増  
禪 勿論 ぶすとも若きもの  
口てし燈子子あふれさのり  
古 依りぬ心や 橋杭  
阿 流波古古と掛て花の江戸  
雛子と 婆も 長き年の尾

思 齋  
素 丸  
馬 旗  
野 道  
老 我  
窓 雪

老情

旅人のうゝや海ささし 稽う如  
脱て思ふ事一巻巻し 文衣  
聖よの綿蒲日より来て 裕か  
おの僧の文結言さよと海もこゝ  
牡丹花もささしり 更衣  
富貴のこゝれ牡丹の葉の上も草  
舟の子よ 板川 ちかむか  
灌佛よ舟の子ささし 川日 和哉

来 示  
久 住  
自 来  
雪 丸  
采 鯉  
竹 風  
兔 六  
旭 伝





大寺城二門を深かかんて  
買明

原をまきさう世也くふ鳥  
玉露

明月の光り満き東の  
曉翁

桐の葉はまきあふ  
東籬

とふ堂大松の尻を  
菊戸

子と女也吃無増は濡り  
范五

あつ鴉も候雨に  
孤狂

雪出しと屋陰の雪満は清水が  
古芳

録水改

楽書の石も流れて  
引録

小原女は踏まもく  
顔竹

三人の子は娘と  
朱明

茶店子機のは若新  
古硯

毒一ッ扇は  
里杏

童顔は露も  
雨月

松杉もみ  
蟠車

夕昏も誘ふ  
信夕

小田原

相列合子村

下

あまのこころのちりそひ

心けしむ人(無)日暮のあつてか 寒和

夕立やくく黄くおる露け 露

夕顔や葉の目けと燃る時 半首

わろ世もやうおもひ傳ふ田舎に 冬戸

うね草の浮おきけり雲の峰 宗崎

ま向ふ如意も捨花の蓮元か 蚤花

跨くほど唯は深屋の帳あけか 素相

廣松

あけぬあふ四角ふ帳帳の招りか 坊芹

萍草もやうあふ所く蓮花 金亀

風鳴枯木晴天雨月照平破夏夜霜

夏明けの雲掃くせく目元か 鳩信

かゝる森の下のけやま水 自来

紅紫物床の鞆重くこもり

柄をよみけり後 茶室

茶



旅の繁城を慕の雨を引連し

鳩信

ほくくまはあはれ夕ぐれのも

自來

地獄へと何のものか油膏

鳩信

四も五と喰ぬ南無字にたす

自來

浦分板の豆腐と海とと押通し

鳩信

桶中の氷をよひけりとなぐ

自來

そかれ馬とのまゝかくを當てり

鳩信

海道中へ 旅泊の穴、花

自來

朝露のやきし朝敷を念ふの月

鳩信

秋夜知すするさあさうさのほく

自來

いそぐ散ら玄園の古きみと屏風

、

麻志油桶の懐り ち明く

鳩信

一度ふあゝぬくと渡し舟

自來

酒樽の石瓶の海へて談

鳩信

茶の沖あつそいけりおかくや非

自來

三月七日 八日 九日のり

鳩信

二十三所と撰禮し一より一は  
より西路の古戦場を尋ねる

甲州一の谷

甲斐の茶花のゆり一の谷 祇嶺  
ちのく廟も 拾うはら秋 氷湖  
甘か— 結露の雨一月— 玉斧  
郷の少いと思ふは 同口 坊斧  
表具作の拾得— 古障子 湖  
筆をかゝるゝ飛てりし 嶺  
下やこに愛宕の名括きく 斧

娘の袂うつら鐘乃風 斧  
何事も有いび—の二挺三 嶺  
辻着の燈籠直是まき之は 湖  
炭賣少きり遠少る 嶺賣 斧  
太く講の菓子折阿の魚心 斧  
彩色色西畑の扇風とる元 湖  
尾せり今冬少んと思さ 炭  
空舟のやふき懐の—すい 斧

初志衣が不衣 毛纏  
行し海一掃も意して遊不自  
疾疾尋てりら羅の辻子  
尻の急の巻へ腰中へ俣俣俣  
口でりる一と鋪と多るる  
鼓も打も切もぬ小くく  
温帳とくく 馬士 意し  
六海もくく 海もくく 石道祖神

寄 湖 芥 芥 湖 芥 寄

中ふま雲の字ふも見ぬあり  
初秋のまの二八とて推く  
未持佛堂に蓮乃が紙  
紅葉のまのくく 行てくく 一の巻  
巻はくく 世子又由めは月  
針立城の字あり 水露拂ふ  
舟は集めく 二の町は秋  
まらくく 揚鼓も腹をきく せは

寄 湖 芥 芥 湖 芥 寄

惣乃子口注明之 典座

芥

草履わく出の露とる麻

芥

あかき思ふもわく根次ま

芥

塘かに西行庵の集り

湖

むらり〜と青柳の舊

芥

西風むらり野分を去る思且哉

素隠士

山ありと南風落て夕部ふ

おろく

冬之部

粗句よかりはるは竹跡も似きる哉

翁

采の果是何りりる海の音

言水

風能一日吹そをりりり

乙由

お

何んぞ元小亭は落と枯地原

祇葉

筋遠子麦城落きる草の菴

来雪

麦高新りりりり結野か

里露



歌仙行

木下の一婦人酒を

招き鳥の羽を 炭賣

押送り剛毛の鼻切

二十戸前ついで 草花

さつと中まき 静也 藪の月

ハッ下、中を 胡蝶の志

能く一羽 厄も 喜屋敷

甘利里

引蝶

坊芹

篩月

露屋

紅貞

不三

團山

竹門の石と 舟の枝折戸

古子買来も 世を 舟の雪

白庭 白庭

いよと 黄髪 替女の 煮ゆる 黄物

軒た 菘と 梅福、舞ふ

夕ふかの 蔓と 細き 二日月

明日と 木津の 中川き 高心

志い 鳩の 猫と 思ふ 崎と ひとり

長富

野雪

白庭

桐舟

梅枝

露屋

篩月

不三

紅念佛のきこもきこ

紅貞

燈籠の川花をわくく東か

長富

正しりお空へ徒引身

桐舟

のどかお富士もさるぬか頭と度

梅枝

湯立の釜城がたつぐりて棟

引藤

姑息志と免がうお小後と

白庭

安神さんの名に返めて書

野雪

しらぎまを孫と抱て下換

坊竹

夕日やわたり驚かきのつ

園山

船や流の傍もかこく百官州

引藤

みんなおあ紫も本一室所

露屋

城責をわがけ果りり前九年

紅貞

さけちおおつらも帰志多一月

不三

も下際うたけお紫を空に今

節自

塔の腰へ風を吹し

坊竹

七十の好い生<sup>#</sup>中<sup>#</sup>さきまの

引藤

五

五

雑口の物もさうり菊水 長富  
 おん又何日おんの赤い由 野雪  
 筆身一本もさうるうか 公庭  
 華も此山さうる戸の明るし 園山  
 杉岩はしし岩子岩捨茶 梅枝

老師七十の冬暖中の雑ねをする、此序し  
 うつ一荊屋子一板二板とて終るを思又々  
 年々其上を越しゆく手の手の事事を  
 たりしおのいさふを後しとありと

おちしし稀に分る暖浦か 吉原 三 遅  
 冬城雑黄にあふ不縁の扱 坊 芥  
 杉の風吹かろししも短くて 兔 六  
 馬法祝儀しし終りて賣る 素 糸  
 池程射を止るれし丁夜期の月 春蟻改 蚕 花  
 つしとのあし露もははは 暹  
 樟の木も弓と矢はあて智はし 糸  
 聲も山海りと又も油屋 花



三崎より出る六の川程大場まで  
石橋十有之間の間に地り異なり

おのゝ源一石乃長橋常時

坊岸

豆腐一石空に賣る

里帆

赤松の輪掃きとて

半宵

何れ教もこれ五つと申す

里杏

荊垣は紫月の影の彼まで

帆

さても袖みとの空、博の

岸

う

故春は志望とては

杏

女中の職なめり

宵

志願はくは海を志望の母

岸

茶碗とて吾と見ゆ

帆

野々々の海を望む

宵

か多しの玉は絶つ

杏

子昔より伊場の

坂

ぐりんとひつ

岸

下巻

杏り山木のやうな形不中り純  
 招借し〜〜花の餘菴屋  
 三日月のたりの星の清らと  
 離のどこ麻結光り静らん  
 万端う古風〜如頃の成産者  
 小ん福い糖ハ堅い菓子石  
 木菴の書簡は〜免て十餘年  
 思かまは中のみ高海〜

雪隠ハぬれど〜住居し  
 新如房の勝る内院  
 鞠料理のあま清楽に〜  
 扇の耳是と〜  
 穿れま〜甲子如雅を留て  
 酒由り〜未後の清  
 中〜結を〜ぬか下の敵帳の目  
 ま〜くの園産な〜豆の鞘

下巻

杏 露 刺 林 豆 帆 宗 峨 霄 新 杏  
 杏 帆 霄 杏 帆 霄 杏

菊よふくぬ枕元の箱負て  
 西寺とりよき只風の音  
 馬行もきく物と牛車  
 小と海あり一海腰子筆  
 汝志寸や谷の古産花ほし  
 水かろぬみ初る流川  
 新 杏 豆 帆 崎 菊

狐村の牛天 小田原陣中

わくかこる紫く啼也かた鳥 麥由  
 胡所の紫は落る井の柳 得魚  
 夢信場いけけ飯子器あて 坊芹  
 海んどとがうとづる牛方 青呂  
 峰子まご日い有あくく夕日板 泉十  
 深島者宵負て連新昨の露 范五  
 さくは藍志ともく筆に新くほし 麥央  
 町く友いがー 若 野 朱明

寺と古大を摺り申す至日如  
 由画  
 物へ申り也 夜昏如腹  
 一路  
 立白き海へてわきの東  
 得魚  
 善の影と傳止てか  
 麥由  
 蘭丸の馬籠もかんて蘭奈侍  
 青呂  
 也 然 我 貴 人 着 せ 貴 人  
 泉十  
 青の粒へ細き古曆  
 范五  
 蒔 陰 不 便 ぶ 亦 骨 の 重 策  
 坊 荷

下分粒又燈坂善の雲  
 一 齋  
 ひそり 筒 物 く 頼 小 子 連 たり  
 麥 夾  
 やふ入のこへて配るやしし指  
 朱 明  
 能さ望へく 塚 跡 へ 墓  
 由 画  
 床の宵是に社の院の坐法の花  
 其 由  
 物みおくらせて 居るも病の奴  
 得 魚  
 十の物九は是の如く 其の如  
 卓 尔  
 明日 切 分 其 を 吃 搦 せ たり  
 青 呂



夏葉子 海へ去る 出か 錦の 錦

麦由

ての中 崎子 多し 板折 戸

范五

龍巻 兄神と 浦巻 牙まき

坊弁

湯立の 釜中 緒と 目出 度

卓尔

なが一 好宿も 遠き 重の 目

麦央

思ふごとく 卯紫の 籠し 初める

其由

茶堂の 水蒸りの 決る 負角力

由画

泡も 切ると 鬼おろし 呑

泉十

え船ハ 猫と 住んで 置か 嘘

卓尔

おちの 用うら ぬ ぬ 鐘

一治

花子 八の 黒門の 名も 二と 海

朱明

子代も ねし 小玉つ 三花 咲

其由

おふ人の 用居と 身と

雪の 日也 傍子と ねた 派の 者

百宇

山嵐 々々 炭 新 友 々々

黒露

挾菜号〜ぬカ〜 清取と 買明

肴〜 多と〜 くらね下詰の薑 百菴

さげ月のどねも類き 籠箱 菜露

此〜ぬ井戸〜 油 虫 啼 百亨

相〜紫柳のちり〜 自然 拾士 百唐

横〜 踏花〜 守 果 山の鞠 賞明

〜川 ありと水〜 遊〜 世 世 歌 子 百亨

葛蒲と背負と背巾〜 立 菜露

取寄る 舟 子 火 籠 紙 付 賞明

酒と 樽 子〜 河 邊 と 茶 屋 百唐

喉と 唾〜 又 茶 の 幅 廣〜 菜露

煙 遠 中〜 忍 び 踏 如 犬 百亨

日 冬 八 分 鶴 子 ぞ 啼 び 星 氷 ち 百菴

葛 菴 で 止 る〜 人 は 荷 籠 一 賞明

春 國 の 僧 尼 也〜 世 の 伝 百亨

り 名 也〜 よりり 其 子 何 也 菜露



二月の望ふは伽羅を煙あめく  
のびくろきびら結ぶうろく  
買明 買露

曲浦考

ゆきみは月も出ぬおや時鳥  
いかに海の花結ば煙る菘垣  
丹鳳 黒露  
若牛尾五把と三把は結分て  
紀逸  
しりびく口へ遠入る云傳  
女 玉江

り

雪の戸結ばは帰る星の音  
探るうらてよりきこえぬの梅  
市栖  
祥雪の乱結りやう貝落る  
買外  
きりかりる光の輝る菜葉  
丹鳳  
揖立て夕アの暮結ぶたの地  
玉江  
哀しうけて是耶魔お子の淵  
能造  
子子ゆき頼と夏書の手結き  
田社  
通い處り高き起す奥  
市栖



耳小光風切免々宵の目  
 星々澄々少りかき程橋  
 見り内々米姑お場の亂と蘇  
 燦々一絲分凱陣の跡  
 山川の矢を浮く舟小かき一海り  
 飛去す川といとび去す身  
 ち水の君揺れ々運のうく碇石  
 ぶさい力と名茶茶の文  
 今鳳 田社 市物 買洋 丹鳳 市柳 紀造 玉江

佛生會

傾珠う生々思々如佛うか  
 志やが、教一海一ハ、咲  
 是駄義かこ山里姑る一さ身  
 みつ々々城々池静あり  
 年家待のち家あり一と弁の目  
 稿の路中ときやと木宛  
 松架 坊寄 淮岨 柴 芥 祖

袖口も綿と海ふく物りくで  
まじく沸て茶糸当切  
。新らりそありと燈の種木町  
手のお記者くすう魚記助  
頼わりの若者く海ふく者若  
身結う記麻也招辨結縁  
春くさの仲宵くふまる杉の風  
く川わ飛柳き川雲を踏

柴 岨 柴 岨 柴 岨 柴 岨

鞋<sup>イタ</sup>とこ七飯結世と春みりり  
管<sup>イタ</sup>田<sup>イタ</sup>ら<sup>イタ</sup>が<sup>イタ</sup>の<sup>イタ</sup>素<sup>イタ</sup>く<sup>イタ</sup> 愛<sup>イタ</sup>娘<sup>イタ</sup>  
はさよさ<sup>イタ</sup>の<sup>イタ</sup>質<sup>イタ</sup>の<sup>イタ</sup>盗<sup>イタ</sup>く<sup>イタ</sup>意<sup>イタ</sup>の<sup>イタ</sup>新<sup>イタ</sup>  
く<sup>イタ</sup>世<sup>イタ</sup>の<sup>イタ</sup>あ<sup>イタ</sup>く<sup>イタ</sup>一<sup>イタ</sup>并<sup>イタ</sup>の<sup>イタ</sup>結<sup>イタ</sup>う<sup>イタ</sup>務<sup>イタ</sup>  
古<sup>イタ</sup>世<sup>イタ</sup>の<sup>イタ</sup>海<sup>イタ</sup>と<sup>イタ</sup>く<sup>イタ</sup>も<sup>イタ</sup>結<sup>イタ</sup>く<sup>イタ</sup>礎<sup>イタ</sup>と<sup>イタ</sup>空<sup>イタ</sup>  
茶<sup>イタ</sup>の<sup>イタ</sup>く<sup>イタ</sup>結<sup>イタ</sup>も<sup>イタ</sup>お<sup>イタ</sup>く<sup>イタ</sup>結<sup>イタ</sup>の<sup>イタ</sup>毛<sup>イタ</sup>  
和<sup>イタ</sup>結<sup>イタ</sup>の<sup>イタ</sup>日<sup>イタ</sup>田<sup>イタ</sup>架<sup>イタ</sup>結<sup>イタ</sup>岨<sup>イタ</sup>石<sup>イタ</sup>出<sup>イタ</sup>く<sup>イタ</sup>と<sup>イタ</sup>  
結<sup>イタ</sup>岨<sup>イタ</sup>肉<sup>イタ</sup>是<sup>イタ</sup>下<sup>イタ</sup>戸<sup>イタ</sup>の<sup>イタ</sup>く<sup>イタ</sup>つ<sup>イタ</sup>結<sup>イタ</sup>

岨 柴 岨 柴 岨 柴 岨 柴 岨

下三十一

茶をりして馬醫者もあつて  
下園をりして種々吟亦  
うしりもを詠みみ<sup>観</sup>と雲の味  
治所の茶湯ゆ<sup>老</sup>も<sup>茶</sup>（茶）  
目録をいりるる茶法  
因前へ取ておぼく夕月  
あつた<sup>茶</sup>の塔を<sup>茶</sup>一<sup>茶</sup>之興  
ふり豆で集こく茶基のこい

茶 芥 咀 茶 芥 咀 茶 芥

○  
意かか<sup>茶</sup>の露の<sup>茶</sup>こ<sup>茶</sup>益の部  
か<sup>茶</sup>と<sup>茶</sup>り<sup>茶</sup>で舟<sup>茶</sup>ま<sup>茶</sup>る<sup>茶</sup>の  
黒いみ<sup>茶</sup>る<sup>茶</sup>り<sup>茶</sup>と<sup>茶</sup>の<sup>茶</sup>候<sup>茶</sup>候<sup>茶</sup>  
西日け<sup>茶</sup>海<sup>茶</sup>り<sup>茶</sup>中<sup>茶</sup>如<sup>茶</sup>ふ<sup>茶</sup>し<sup>茶</sup>雨  
雲<sup>茶</sup>の<sup>茶</sup>ふ<sup>茶</sup>る<sup>茶</sup>人<sup>茶</sup>を<sup>茶</sup>え<sup>茶</sup>り<sup>茶</sup>茶<sup>茶</sup>  
四茶<sup>茶</sup>玉<sup>茶</sup>條<sup>茶</sup>の<sup>茶</sup>つ<sup>茶</sup>り<sup>茶</sup>茶<sup>茶</sup>

茶 咀 茶 芥 咀 茶 芥



蘭雞

かち淵を上げ 距キや三日の月

赤い河を流し 白桃の露

猿の舌風行 万々青糸一と

後の如城も直下りお祭

きり石一 揺らぎを流すおつこい

どろろと流すお家の雨や

何佛

黒露

鳳尾

佛

露

尾

9

村雨のうねりせ 小路を横ふぐり

版のまがね 醫者の陰尺

鳥のふん下 向の袖は目出さがり

かきしと 謎をとけぬみ第

世藝のふりま 木过のちま敷

い酒くし 一ひねりお月の小

まきしと 雪の家の夕煙

狭い道が 通る瘡イモつ

佛 露 尾 佛 露 尾 佛 露

お乳の入口くちん生れん  
雲底素なれ月の夜  
その花は紋花撮の事て  
七音は流く世の中  
まどくしと狐子つと  
お宿よこ内は歌世音の  
かあてくちちいか寺  
てくばきあくはく昔

尾 窟 佛 尾 窟 佛

まはらに記念あり  
らあはらに記念あり  
お宿よこ内は歌世音の  
かあてくちちいか寺  
てくばきあくはく昔

尾 窟 佛 尾 窟 佛

渡橋子の一字の  
 多我撫の如く  
 初意の暖簾子の  
 美しき松布川の  
 堅木よ咲はる花の  
 うつらひ帯と堀  
 静あり  
 露、尾、佛、露

一 望 孟津亭

川がー雲雀隊の末末の如  
 扇をかきー初分 風一光 餅月 泉仙  
 去るみ茶屋の海路とふと泊る  
 刺してとて是より川にやれし 孟津 以六  
 半月の才襟のけと草履丸 祇葉  
 八日九日十日茶やの島 黒露  
 和葺の窓の高坂 都末一町 二町  
 子うちうらにれり氣位とやと 夏若

肴板の里ごよ巻と栢巻吹  
蕙の露結けらしくと漏  
眩まけ茶碗と香ぶさか  
桐子と阿もね仲んの鶴  
侍の川邊を兒さの謡ひなる  
海新葉毛よ夕日あか  
只の井に立原寺の井のか寺  
お海して垂とまごころの麻

竹酔  
孟津  
以六  
泉仙  
解自  
二町  
夏若  
祇葉

詩よ曰昔のゆとりあ日新履  
秋真とんむ離子三寄  
衣交着と掛る下はる原の岸  
玄関し二人品川乃君  
ちげりき分夏は露とんて茶賣  
ひる<sup>意</sup>海の板やが<sup>残</sup>んか<sup>り</sup>る  
由<sup>り</sup>る<sup>中</sup>ん返事<sup>中</sup>ひんを徒<sup>り</sup>て  
唯武士の具は吹と形ふじ

竹酔  
以六  
泉仙  
夏若  
祇葉  
解自  
馬露  
夏若

松の雪星のいり冬もや松の  
 うらぎ火口の竹ぬ<sup>炸</sup>り<sup>舎</sup>や  
 小い版針の<sup>あ</sup>ら<sup>か</sup>く<sup>何</sup>も<sup>あ</sup>ら<sup>ず</sup>  
 肉糺<sup>一</sup>ばんと石町  
 中糸<sup>ま</sup>あ<sup>ら</sup>ぶ<sup>ど</sup>か<sup>尚</sup>の<sup>丸</sup>い<sup>目</sup>  
 秋海棠<sup>ハ</sup>岩も<sup>粒</sup>ま<sup>ら</sup>  
 四中<sup>崔</sup>お<sup>る</sup>石<sup>う</sup>か<sup>大</sup>名  
 原<sup>風</sup>ま<sup>ら</sup>の<sup>清</sup>き<sup>青</sup>竹  
 二町  
 弁<sup>結</sup>  
 以<sup>六</sup>  
 糸<sup>仙</sup>  
 二<sup>町</sup>  
 買<sup>明</sup>  
 孟<sup>津</sup>  
 弁<sup>解</sup>

冬<sup>ふ</sup>の<sup>間</sup>の<sup>間</sup>の<sup>葉</sup>松<sup>松</sup>  
 冬<sup>結</sup>の<sup>川</sup>わ<sup>ら</sup>と<sup>き</sup>川<sup>と</sup>三<sup>有</sup>  
 冬<sup>と</sup>の<sup>苗</sup>字<sup>結</sup>の<sup>意</sup>結<sup>地</sup>  
 かり<sup>ら</sup>衣<sup>結</sup>子<sup>結</sup>毛<sup>と</sup>結<sup>巾</sup>  
 解<sup>目</sup>  
 紙<sup>葉</sup>  
 買<sup>明</sup>  
 夏<sup>否</sup>

早急柳増歩

未<sup>タ</sup>の<sup>風</sup>や<sup>柳</sup>の<sup>竹</sup>なり  
 苗<sup>と</sup>の<sup>田</sup>の<sup>葉</sup>や<sup>あ</sup>葉  
 祇<sup>葉</sup>



皂莢の葉やまがら——如家所 宗峨

山一ツこ——出て寒——枯野つ 麥止 三ノ浦の馬

石棚の邊は味——多雨の部 青呂

老味を信ちる屋よとちりてを採のまゆも

葉枯と木の葉蔭園の一重の秋 半宵

枇杷は有念の鏡や昆蟲の閑 裡菊

家袖は月こぼる有き由取哉 狐狂

四ツ子味は心算もふる空煙か 顔弁

越の後列は南より北に流る

雪の口や焚かぬかあか縁ほしし 梅戸

富士一ツ山は出て空に野らふ哉 泉川

麦蒔や古記神より投陸中 斗七

星一ツうらまはれりや幸とすき 州長

○ 初ゆきや青く見上る 常 箱戸

山茶葉は楓引かぬの噴るが 雲里

新玉の明んと猫踏ふはまら 興平

下四ノ

寒 哉  
 同 人 心 事 一 人 也 小 松 子 香  
 采 也 百 八 色 草 鐘 鼓 聲  
 誰 愛 秋 水 一 川 流 似 夕 陽  
 尾 也 石 子 守 神 也 豊 一 一 也 龍  
 此 也 紫 也 屋 瓦 子 紫 也 初 時 雨  
 酒 の ぶ け 招 せ 尊 一 一 一 大 師 講  
 也 法 師 小 共 招 一 一 一 也 室 寸 寸 也  
 初 雪 也 ま け 小 無 非 じ 一 一 一 也 ち  
 光 波  
 此 君  
 字 石  
 調 瑟  
 免 考  
 祇 院  
 琳 園

画 子 何 と 何 と 書 一 一 一 時 自  
 一 羽 片 月 子 紫 也 子 鳥 也  
 茶 の ぶ け 招 せ 尊 一 一 一 大 師 講  
 亦 松 子 月 子 紫 也 子 鳥 也  
 廣 庭 の 隅 子 紫 也 子 鳥 也  
 魚 子 紫 也 子 鳥 也 茶 の ぶ け  
 橋 之 中 一 一 一 也 木 也  
 暖 也 事 始 一 一 一 也 也  
 滿 枝  
 壺 子  
 雨 聲  
 由 和  
 蘭 如  
 自 來  
 山 町  
 久 位



少翁と少君ハツ子の名也東堂  
 八相と花と名の如く一色ホ立  
 川音と氷の舞子戸内り雪  
 陽を水溝日より如有ひさ  
 赤かすーや伯母の顔の元かし  
 炭とらや瓢の盆いかにり  
 赤津川の人吹きくは空り如  
 魚鬚  
 兔六  
 姿好  
 杜丘  
 京川  
 黒露  
 買明

田張部とく己う部気なく  
 静ふた女波男泣や天の川  
 鳥追也筆いせきーは下りん  
 野々畑は仕書ふた細十三松  
 赤子散り櫻小つり之稲雀  
 院の豆腐や骨気ほくまは  
 志々紙く底や雪のいほく  
 天子河もらほくまは地と鯉  
 夏若  
 二町  
 翠如  
 松架  
 淮岨  
 赤川

ゆく秋や紫の道まゝの海の色 素九

之崎へも此路のなをそは川

水声んや麓園に宿る借をま

お梅やあゝまのあゝのあゝ日より

所離と涙かへまより 交衣

雪の日やまおのりうを櫻

春雨や湯舟の貝法まが空し

まをへまゝに於て 樹屋の露の音

野道

老我

世の中は夢を思をりり 運橋 馬雄

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まきまゝにまゝの飛や小松の冬

本町に居をうつして

夏物と一度に輪ま住居うね 平破

観よ切と道を度るや暮糸 樓川

まゝにまゝのまゝにまゝにまゝに 書永

まの川りまゝにまゝにまゝに 黒露

雲雨のまじりてはよ衣かえ

長鶴

足跡は狐の跡に落葉か

何佛

針路の細くはるけき鳥か

藤の葉はつらつらに響く

中へ響の響もや雉子の落し

巻を海守簾くはる胡蝶哉

鳳尾

卯花やまじり遊んては只か

松風の吹かばはる鹿の聲

山伏の交言言さよ枯壁原

雲の蒸気はまじりては

玄路

まじりては雲や鏡りては

朝日とては起りては

水魚の目とては

古然

よし芦花は別れは

新葉と垣切押は

夢の世に納豆を寐ては

あま花をきく世屏風の名跡が  
殿子

狂人の耳磨めやまやう〜  
、

麦搥とくちづく萩の風情が  
、

去後銀の山あり雪の甘ら〜と  
、

梅花吟集

二日〜月も句ふや梅の花  
紀逸

七〜〜〜口もやせ星迹  
、

山陰の香口ぬくや梅の滝  
田社

稲妻や〜〜〜梅の尖り〜  
、

星いふか枝〜〜梅  
丹鳳

あ〜〜〜梅の宿世印木垣  
、

十六おや素顔ありぬ星の雲  
、

落葉日紅霞を湛るや大根引  
、

かつ〜〜のみ流〜〜を

飛中きを雉子出〜山路が  
百菴

相撲とりよ秋の夕顔い〜  
買明

子加の園子迷ふ〜〜

下園也煙うもあがれ程のやみ  
 きほご酒落雲よ玉子もるる  
 道の者刀豆下分垣根うか  
 夏寒し一畝ぬ塘若水の是  
 後拂ふ影も影し雪の渡し船  
 藤く法系もゆる流氷の上  
 踊らんを此月一羅也者の重  
 誰とましきる解舟も夕時雨

思慮  
 對柳  
 窓雪  
 以六

伏見の松山うく

ありとくにならそふ松若右山か  
 ありとくありおと堂是周南うか  
 踊の輪ほりきて帰る松明うか  
 雲離也をしやう松若物ちりい  
 名能付と松もあしよの夏の月  
 晴かよのち松を枕の初蝶か  
 松風もあしと引き消さ日標茶屋

甲 花笠  
 スルカ 鐘山  
 金危  
 乙 見  
 淡松 素桐

おろし波ふ日少くもいふは源氏  
黒露

源氏より平家まで源氏の秋  
、

海へは雲のうらみなるは源氏の秋  
、

寺町や夕日の中は百舌鳥の聲  
鳩信

りこりこ柳を五人のいとみ  
自来

手紙つねに睡を無き惜まらり  
久住



後序

之子者何れは江東に居たり稲

中庵とらふいつの山は坊舎地とらふ

道心者有又甲斐に松より竹高

と書くは老人とらふは一人とらふ

三川の若くは老をわけるは、かゝる老

あちこちをわけるは、世八と云ふ九の

と云ふは、自内川の下流に、まじりて、

甘藷の庵を歩いた先 橋のそばよ  
りか 新著の 細乃のほろ 窗か 招き  
一 庵を歩いた先 橋のそばよ  
秋甲陽の社中よき 文集を撰 杉江  
の田知己 新著

府の味ありまふ

任吉芸社より

墨吉文集と云 一集 函とにふ人の  
國じりりと 戯きく 其事 法と書記を

よと 姑りと 先りみり 新著  
いふと 姑りと 先りみり 新著  
墨堂 堂と云 一集 函とにふ人の  
今 菴 庵 庵と云 一集 函とにふ人の  
あしと 菴 庵 庵と云 一集 函とにふ人の

萬屋清兵衛

藏板

寶曆七丁巳歲夏五月吉





